

須田一弘 『ニューギニアの森から：平等社会の生存戦略』

■出版地：京都 ■出版社：京都大学学術出版会 ■出版年：2021年 ■総頁268頁 ■定価：3000円＋税

中尾 央*

本書は、主にニューギニア内陸部で生活するクボという民族集団に関する、生態人類学的調査の記録をまとめた書籍である。シウハマソンという一集落での調査を中心としつつも、同じくニューギニア海岸部で生活するキワイという民族集団などとの比較考察も行われており、興味深いデータと考察が展開されている。

以下、本書を評していく前に一点断っておかねばならないが、評者は生態人類学どころか、人類学全般に関して素人に近い人間である。したがって、以下の短い書評はあくまでも、人間進化という評者の主たる興味関心の観点から行われたものであり、人類学を専門とされる方々からすれば的外れの点を多く含んでいるだろうと推察される。とはいえ、専門や関心の異なる人間からの評として、一定の価値はあるだろう。

まず、本書の構成である。章立ては以下の通りとなっている。

第1章 ニューギニアの森へ

第2章 クボの資源利用を測る

第3章 資源利用の仕組みを探る

第4章 交換と邪術と妬みの関係

第5章 クボの森からキワイの海へ

第6章 森の時間、海の空間

以下、簡単に本書の内容を要約する。第1章では筆者がクボの集落であるシウハマソンで調査を開始するに至った経緯、また調査地シウハマソンの概要について、簡単な説明が行われている。第2章以降では、クボの生活に関する定量的データがまとめられている。まず第2章で筆者は、クボがどのような食糧を利用しているのかについて紹介した後、クボが生活の中でどのような活動に時間を割いているのか（表2-1、p. 69）、どのような食物をどのくらい摂取しているのか（表2-2～2-4、pp. 80-84）についてまとめている。後者につ

いては1988年と1994年のデータが示され、6年間での変化も見て取れることが興味深い。特に、その変化の要因が「自然環境のみならず、宗教によっても影響を受けている」（p. 86）と述べられ、実際宗教（キリスト教原理主義の一派）の広がりによって野ブタ猟がなくなるなど、利用食物が大きく変化している。このように、生活環境の変化ではなく、人々の信念体系の変化によって生業が大きく変化している点は、重要なポイントであろう。第3章では主食であるサゴデンプンとバナナの生産性や生産グループについてのデータが示される。シウハマソンでは定住化にともない、サゴデンプンの原料となるサゴヤシに所有権が認められている一方、所有権を超えた利用も柔軟に認められているようだ（p. 117）。これにより、「個人間あるいは世帯間の不平等は平準化されていたと考えることができ……こうした資源利用の柔軟性は、彼らの生活の根底にある平準化への強い指向性に基づいている」（p. 120）というのが筆者の見解である。そしてこの平準化への強い指向性、すなわち「オブセッション」（p. 170など）について、第4章でさまざまな事例を挙げながら考察を行っている。儀礼時の食物交換（p. 138）、姉妹同時交換婚（p. 143）などがそれであり（そしておそらくは狩猟で得られた獲物の分配（p. 56）もそうであろう）、さらに、このオブセッションは死をめぐる邪術とも関わっているように見える（pp. 147-157、p. 244）。第5、6章ではここまで詳述されてきたクボの各種データが、（森林部で生活するクボとは対照的に）海で生活するキワイの人々、そしてその他のギデラやオクと呼ばれる民族集団の集落などとの比較を通じて考察される。

以上のように、平準化へのこだわりという観点を一つの軸としつつ、クボの資源利用やさまざまな生活習

* 南山大学

慣、そして世界観を考察している本書は、丹念な生態人類学的調査を重ねた民族誌として重要な成果であろう。後でも触れるように、狩猟採集民社会の平等主義へのこだわりは Boehm (1999) 以降、人間進化の文脈でもさまざまな形で考察されてきたテーマである。また、近年盛んになっている文化進化研究において、人間の文化的活動の心理的側面が重視されており (e.g., Mesoudi 2011)、本書の成果は生態人類学だけでなく、文化進化研究の分野において示唆に富む内容となっている。さらに、地道なフィールドワークにもとづく定量的データも、生態人類学だけでなく、文化進化研究などの今後の研究にとって大きな意義を持つであろうことは間違いない。後で触れる行動生態学についてもいえることだが、やはりさまざまなフィールドで得られたデータの蓄積が、後々の理論的研究においても重要になってくるのである (e.g., Gurven 2004)。

以上のような本書の価値を踏まえたうえで、評者が気になった点を以下で述べておきたい。まずは概念的な問題である。本書では平準化という言葉が用いられるが、これは平等主義とはどのように異なるのだろうか。あるいは、同じものなのだろうか。通常、社会的格差がない、あるいはそれが少ない状態を平等主義的状态と呼んでいるわけだが、本書での平準化も概ねその意味で用いられているように見える (たとえば p. 120、170など)。もしかすると生態人類学では平準化という言葉が一般的に用いられているのかもしれないが、門外漢にもわかるように、重要な概念については最初に定義を行う必要があっただろう。平準化という概念が本書の中心をなしているうえに、本書のタイトルにも「平等主義」と入っている以上、この点はやはりもう少し注意しておくべきではないかと考える。

次に、いい意味でも悪い意味でも、フォーカスが狭いように見える点である。生態人類学が「安易な一般化」(掛谷 1983: 240) を避ける傾向にあるのは (その理由も含めて) ある程度理解できるとしても (pp. 244–245 など)、もう少し広い視野からデータその他の解釈を行っても良いのではないだろうか。たとえば、伝統的社会における平準化・平等主義へのこだわりという観点からアプローチするのであれば、やはり先述した Boehm (1999) の古典的研究に言及しながら議論を進めることが考えられる。「安易な一般化」を避け

たせいなのかもしれないが、一方で Sahlins (1972) の理論的研究に依拠した解釈は提示されている (p. 71)。また、ハッザに関する Woodburn (1982) の研究が取り上げられ、いわゆる行動生態学的研究の欠点が批判される箇所もある (pp. 165–166)。ここでも、Woodburn の研究が古典的研究であることは確かだが、同じくハッザの行動生態学的研究として、より体系的かつ最新の研究成果である Marlowe (2010) などを参照すべきように思われる。行動生態学的研究と比較し、そうした研究との違いを際立たせるのが主要な目的であるのなら、やはりもう少し新しい研究に触れておくべきではなかろうか。

最後に、細かい点ではあるが、いくつか誤記が認められる。たとえば、文献情報に関する誤記として、Knauft を Knouft と記載している箇所 (p. 151) がある。また、言葉の反復 (「……栄養素摂取量の比較の比較」 (p. 231)) も指摘しておこう。

参考文献

(日本語文献)

掛谷 誠

- 1983 『「妬み」の生態人類学—アフリカの事例を中心に』『現代のエスプリ別冊 現代の人類学1・生態人類学』大塚柳太郎 (編)、pp. 229–241、至文堂。

(英語文献)

Boehm, Christopher

- 1999 *Hierarchy in the Forest: The Evolution of Egalitarian Behavior*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

Gurven, Michael

- 2004 To Give and to Give not: The Behavioral Ecology of Human Food Transfers. *Behavioral and Brain Sciences* 27(4): 543–560.

Marlowe, Frank

- 2010 *The Hadza: Hunter-gatherers of Tanzania*. Chicago, IL: The University of Chicago Press.

Mesoudi, Alex

- 2011 *Cultural Evolution: How Darwinian Theory can Explain Human Culture and Synthesize the Social Sciences*. Chicago, IL: The University of Chicago Press.

Sahlins, Marshall

- 1972 *Stone Age Economics*. New York: Routledge.

Woodburn, James

- 1982 Egalitarian Societies. *Man* 17(3): 431–451.